

尖閣諸島の法的地位 —日本領土への編入経緯とその 法的権原について (中)



尾崎 重義
(筑波大学名誉教授)

- 1 前書き
- 2 前史—近世琉球と尖閣諸島
 - (1) 尖閣諸島の地理的位置
 - (2) 島名考 (以上、前号、一部本号)
 - (3) 近世期、尖閣諸島の地位—「(地理的・歴史的に) 琉球の島」という認識の定着— (本号、一部次号)
- 3 日本領土への編入経緯 (1885～1895年) とその法的権原について (次号)

(2) 島名考 (続き)

「釣魚嶼」について (補論)

本論文 (上) で見たように、陳侃の渡琉 (1534年) よりはるか以前から、尖閣諸島の存在は沖縄の人々には知られていたものであり、島名もつけられていた。一方北京の宮廷の官人である陳侃は福州・那覇間の航路について全く知らず、航程の全てについて、冊封使船に乗り込んだ琉球王府派遣の迎接使と琉球人の水先案内人に教えられていた。(そもそも、当時中国人が台湾島や台湾海峡の側から、北方の半架諸島から尖閣諸島にかけての海域に出かけることは、その必要もなかったし、その厳しい自然条件からしても、まず無かった。当時のポルトガル人のシナ海より日本への、又、日本よりマカオへの航路を、『元和航海記』を参照して探ってみると、マカオからは台湾海峡では澎湖島の附近より台湾の見える近傍を、北東微東の方向に三昼夜航行して、この海峡を通り越した後は北東の方向に航行して、宇治島、草垣島に直行するものであって、琉球、台湾に寄港せず、又これらをくわしく観察し得る航路は通らない。また、日本からマカオに行く場合には、長崎より中国のスンボル (松門。揚子江河口の南方の陸地突端部。寧波の近く) に直行し、その後は大陸沿岸がほとんど見える程度に航

行するもので、これまた琉球や台湾の附近には近寄らないのである¹⁾。) したがって、尖閣諸島の島名についても、陳侃が同船の琉球人から琉球での呼称を教えられて、そのまま記録にとどめたと見るのが自然な見方である。

黄毛嶼は「クバシマ」の音をそのまま漢字で表記したものであり、また赤嶼は島の外観に由来する島名で、琉球人の古くからの呼称に拠っている。「釣魚嶼」が琉球人の「イーグンジイマ」「魚釣島」「魚釣^{ウオツリ}」に由来することも明らかである。ここまでは前述した通りである。ただし「釣魚嶼」については、やや注意が必要であると考ええる。それは、福建など沿岸の中国人には、陳侃渡琉と同じころ、台湾 (小琉球) についての情報が入ってきていて、冊封使とは別のルートで、台湾の近くの海に「釣魚嶼」という、自分たち (中国人) が名をつけた島があることを知っていた可能性があるからである。それはどういうことであろうか。

15、16世紀にかけて台湾島 (小琉球) の存在が、沖縄諸島 (大琉球) とは区別されて次第に中国人に知られるようになり、まれにはそこまで出かける中国人も出てくると、台湾周辺の海には魚が豊富にいることが伝えられるようになった。(十七世紀初頭には中国では台湾周辺海域が豊富な漁場として知られ、福建の漁民たちが高値で売れるボラをとるために台湾島沿岸まで出かけていた²⁾。) 陳侃とほぼ同時代の中国の文献『籌海図編』、『日本一鑑』、『順風相送』などには、台湾近海の記事に「釣魚嶼」という島名がしばしば登場する。しかし、それらの記事を仔細に見ると、それが尖閣諸島の島 (今の釣魚嶼、すなわち魚釣島) を指しているとは思えないのである。以下でその点について検討する³⁾。

1. 『籌海図編』 (1561年) の「釣魚嶼」について

同図編巻一の『沿海山沙図』の福七・福八図では、福七図の上部沖合の方に左から右 (西から東) に「鷄籠山」、「彭加山」、「釣魚嶼」、「化瓶山」の順に、島名が附された島が画かれており、それが福八図の「黄毛山」、「橄

1 中村拓著『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図 I』(東洋文庫、昭和41年) 59頁。また、藤田元春著『日支交通の研究』(富山房、昭和13年)「第六章 元和航海記興路の研究」、232～288頁参照。

2 永積洋子、「東西交易の中継地台湾の盛衰」(佐藤次高、岸本美緒編『地域の世界史9 市場の世界史』(山川出版社、1999年))、346頁。

3 詳しくは、筆者の前論文 (「尖閣諸島と日本の領有権 (緒論)」(その2)『島嶼研究ジャーナル』2巻1号 (2012年)、15～24頁。および、同論文の「(その3・完)」、同ジャーナル2巻2号 (2013年)、21～24頁) 参照。

欖山]、「赤嶼」に連なっている。それを見ると、釣魚嶼は彭加山（彭佳嶼）と花瓶山（花瓶嶼）の間に位置している。すなわち、この図では釣魚嶼は明らかに半架諸島のなかに（位置からして棉花嶼か）画かれているのである。一方、福八図の黄毛山は尖閣諸島の魚釣島（先に見たように、当時の琉球での呼称は、クバシマであった。）の位置に画かれており、次いで「橄欖山」は同じく久場島の位置に画かれていると見ることができる。そして、釣魚嶼と黄毛山との間はかなり離れている（四更、約130キロメートルなのであろう）ことも、次に紹介する籌海図編本文の記述に一致する。

『籌海図編』巻二の本文「福建使往日本針路」は大意次のように記す。

「福建の梅花所から外洋に出て十更で小琉球（台湾島）に達する。小琉球の北辺を過ぎた後、鶏籠嶼（基隆島）・梅花嶼（棉花嶼）・花瓶嶼・彭嘉山を通過する。彭嘉山の北辺を過ぎて十更で船は釣魚嶼を標識として認める（原文「取」）。釣魚嶼の北辺を過ぎて十更、南風には単卯針、東南風には単卯針あるいは乙卯針を用いること四更で船は黄麻嶼に達する（原文「至」）」と。

最後のところは文章が混乱しており、文面からは、釣魚嶼から黄麻嶼までの距離が十四更（十更プラス四更）なのか、十更なのか、それとも十更なのか不明である。（筆者は、この文の「十更」は誤って挿入されたものであり、それを省いたら良いと考えている。）仮に最短距離をとって四更としても約130キロメートルであり、とても尖閣諸島の魚釣島と久場島との距離として見ることはできない。現実の両島は相望む位置にあり、その間の距離は実際には約27キロメートルであり、一更にも満たない。いずれにせよ、この記事からは「釣魚嶼」を尖閣の魚釣島（後代の中国人のいう釣魚嶼）と見ることはできない。なぜならば、もしそうすると、その島から約130キロメートル先に黄毛嶼が存在しなければならないことになるが、実際には久場島から先は久米赤島（赤尾嶼）まで島が存在しないからである。したがって、この記事と辻つまを合わせるためには、どうしても「釣魚嶼」の方をもっと西方に（約130キロメートルは）移動させなければならないことになる。この距離（四更。約130キロメートル）を西方にとると、半架諸島の彭嘉嶼か棉花嶼に行き当たる。（実際の彭佳嶼と尖閣諸島の魚釣島との距離は約140キロメートルである。）つまり、この記

事の「釣魚嶼」が実は半架諸島（彭佳嶼か棉花嶼）であり、「黄毛嶼」が尖閣諸島（クバシマ（魚釣島と久場島の総称））と理解すると、島の位置や島と島との間の距離の点で、実際ときれいに符合するのである。要するに、釣魚嶼と黄毛嶼との間が（少くとも）四更とする記事からは、当時「釣魚嶼」が半架諸島の彭佳嶼か棉花嶼を指していたとする推論が自然に導かれ、福七図・福八図の絵図とも一致するのである。

もう一点指摘しておく。前述したように、『籌海図編』巻二の「福建使往日本針路」では、釣魚嶼については目印として認める（原文「取」）であるのに対して、次の黄麻嶼には到着する（原文「至」）と記されており、以後、赤坎嶼（赤尾嶼）、古米山、馬岬山（馬齒山、今の慶良間諸島である）まで全て到着する（原文「至」）であり、最後に「大琉球の那覇港に至り、停泊する」となっている。これは、釣魚嶼が目印となる途中の島であるのに対して、黄麻嶼以下が目的地（琉球領内）であると考えられていたことを示している。『籌海図編』の著者は、黄麻嶼が琉球諸島に属する島であるのに対して、釣魚嶼はそれには入らない手前の島であると考えていたのであろう。ここにも、当時中国人の間では、「釣魚嶼」が尖閣諸島の島（魚釣島）ではなくて、もっと手前の台湾周辺の半架諸島の島（おそらく彭佳嶼か棉花嶼）と見られていたことが示されている。

2. 『日本一鑑』（1556年）の「釣魚嶼」について

この文献にも「釣魚嶼」が登場するが、果たしてそれを尖閣諸島の島（和名、魚釣島）と同定することができるであろうか。筆者は『日本一鑑』を原文通り正しく読むならば、それはできないと考える。以下、そう考える理由を述べる。

同書第三部「桴海図経」の巻一「万里長歌」の関連箇所は大意次のようである。

「或いは、梅花の東の山麓から出航する。そうすると鶏籠山上から釣魚嶼を見渡せる（或自梅花東山麓 鶏籠上開釣魚目。）」（七言長詩。これに、以下のような鄭舜功の自注がつけられている。）「梅花所から約十更で小東島（台湾）の鶏籠山に着く。鶏籠山からは約十更で釣魚嶼に達する。釣魚嶼は台湾海域の小嶼である（釣魚嶼 小東小嶼也）。釣魚嶼を過ぎると約四更で黄麻嶼に達する。黄麻嶼を過ぎて約十更で赤坎嶼に着く。以下、